
マミさんのある夜のこと

月草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マミさんのある夜のこと

【コード】

N1668BA

【作者名】

月草

【あらすじ】

魔獣との戦いを終えて帰宅した、マミさんのくつろぐ様子を描いた作品です。

マンションのエントランスに入るころ、時計は七時を回っていた。二の腕がやや痛むする。魔獣の反撃をうけた箇所だ。エスカレーターへ向け、合成樹脂のタイルを踏み進む。上りボタンを押し、エスカレーターを待つ。到着して扉が開き、中に入る。ボタンを押し、待っている、誰かが駆け込んできた。

「あら、マミちゃん」

「白川さん。こんばんわ」

「こんばんわ。相変わらず美人ね。私も入らせとくれ」

「いいですよ。どうぞ」

白川という婦人は、五十代後半の女性だった。スモーク眼鏡をかけており、黒ずんだ花びらの舞う茶色スカートをはいている。普段は険しい顔をしているが、マミを見かけると、ことのほか優しい表情になる。きつと家では苦労しているのだろう。白川婦人はスーパーのビニール袋をヒジにかけていた。

「お買い物ですか？」

「ちがうのよ。ダンナのズボンが合わなくなったから、スーパーで仕立て直してもらってきたの」

「あら、おふとりになられたんですか」

「それがね、主人つたらこの間、手術して左足が短くなったのよ。ちよつとだけ。歩くのに不便そうだから、行ってきたの」

「そう……ですか……」

マミの表情が曇った。事情がずいぶん深刻だ。それを察したのか、白川は言葉を続けた。

「いいのいいの。たいしたことないんだから。それよりも、あなたの顔の方が大変よ」

「わたしの顔、ですか」

「そう。ほつぺた腫れてるわよ」

マミは天井を見た。防犯カメラの隣の鏡に、頬が腫れた自分が映っている。魔獣の攻撃のせいだろう。

「どうしたの、そのケガ」

「これは、その。ちよつと、彼氏にふられちゃって」

「まあ、女の子をぶつなんて、信じられない男ね」

「は、はい……」

エスカレーターが開いた。マミは白川に挨拶をすると、部屋めがけて退散した。間違っても、魔獣と戦ってへマしたんです、なんて言えない。

あたりはもう暗い。風が吹くなか、見滝原の夜景を見渡す。辺りに魔獣の気配がないことを確かめ、カバンから力ギを取り出す。家に帰ると、やっと安心できた。靴を脱ぎ、上着をクローゼットに架けると、洗面所を指す。鏡を見る。頬が腫れている。指輪形態のソウルジエムを宝石形態に戻し、元の顔にした自分を思い描く。目を閉じて念じる。ソウルジエムが発光すると、腫れた頬に染み込むような心地好い冷たさを感じた。目を開くと、頬の腫れはなくなっていた。

マミは浴室に入る。スイッチを入れると、勉強部屋に行く。夏休みも終わり、受験勉強も本格化してきた。さやか of 戦死のシヨックも和らいだいま、ようやく集中力が戻った気がする。翌日の授業に必要な教科書、ノートのカバンに詰める。そして、「学習新研究」というテキストを机に置く。A4版のこのテキストは五冊あり、数学は青、英語は赤、理科は緑と、科目ごとに色が決まっている。マミはこれらのうち英語のテキストを選び、過去完了形の節を開く。単語の意味と語順整理、和訳、そして厄介な英訳問題がある。これらが宿題だ。頭を悩ませ取り掛かる。英語はわからない単語が多いとわずらわしい。辞書を引いても、意味が多い単語に出くわした時、混乱する。辞書にある記号もわかりにくい。こまごました文法を習うよりも、辞書の扱いの方がよっぽどためになるのではないかと

マミはいつも思っていた。

数学の合同と相似証明の問題、社会の地理と日本史の宿題を終えると、9時半を回っていた。風呂はとづくに沸いていたが、それはさておき、リビングに出てパソコンを起動させた。インターネットへ接続し、検索エンジンで「ニヤニヤ動画」を検索する。画面一番上のサイトをクリックする。テレビを模した、意図的に気力をみなぎらせられていないキャラクターが特徴的な動画サイトを開くと、マミはサイト内検索で「魔法少女あかり マギカ」と検索する。マミが好きな有料動画で、休憩のとき試聴する。これは本来のタイトルではない。もとのタイトルは「がちゅり」という、りもな氏原作のギャグアニメだった。それが、速筆で有名な作者の思い付きで「ガチンコの魔法少女が描きたい」ということで、何の前触れもなく路線が変わり、十二話の予定で後半四話を大幅に改変して「魔法少女編」が始まったのだ。お祭り企画のはずが、面白い。今日は第三回が放送される。マミはそれまで、魔法少女編第一話を試聴することにした。

底抜けに明るいオープニングの後、主人公赤間あかりが、夜中に窓から射すまぶしい光で目を覚ます。窓から外を見上げると、巨大な円盤が夜空を埋め尽くしていた。その輝きに目を奪われていると、部屋の方から声がした。

「やあ、赤間あかり」

「だ、だだだ、だれ!？」

そこにいたのは白いリスともウサギともつかない、奇妙な生き物だった。キュウベエに似ていて、声までそっくりだから、マミは見入った。生き物はチャリナと名乗った。その後、ギャグマンガの主人公らしく、あかりは動揺する。そして、決めゼリフ「いいから契約だ!」である。説明は全くない。開始一分で、あかりは魔法少女と化した。マミは爆笑した。そして、あかりが朝起きたとき、その手には変身アイテム「マギガラス」が握られていた……。

「まるでわたしよね」

「あかりが登校すると、クラスに新しいメンバーが紹介される。『香久山^{かくや}のどか』という、美少女だ。転校生ではなく、病気で登校できずにいたらしい。回復したため、今日から登校したのだ、というのどかはあかりの隣の席に座る。そして、のどかはあかりと友だちになり、あかりの所属する『ごらく部』へと入部する。Aパートの間は、これまで通りのギャグアニメだったが、Bパートから変わった。町に突然、オーロラが出現し、冬でもないのに雪が吹き荒れる。あかりとのどかが帰宅する途中、二人は怪物に遭遇する。チャリナが現れる。状況を説明する。

「あれは『メフィストの戯れ』。君たち『ゆり魔法少女』が戦うべき相手、『アカーシャの邪神』の手下だよ」

戸惑うあかりをよそに、のどかは変身する。メフィストの戯れを撃破したところで、第一回終了。のどかが心臓を押さえたことが伏線となり、第二回。ニュースでの報道。世界を異常な寒冷化が遅い太陽を始めとする、宇宙全ての恒星が光を失い始めた、と。チャリナは言う。

「アカーシャの邪神は、宇宙のエントロピーを吸収する。簡単にいうと、宇宙にできたガン細胞なんだ。改めて自己紹介しよう。僕は地球担当の『レオセーナ』、識別名称チャリナ、君達ゆり魔法少女の動力炉だ」

「レ、レオセーナ……って……?」

「それはね」のどかが言った。

「宇宙にそなわる免疫機能みたいなものの。人間や生命体に、エントロピーが平等に行き渡るよう、エネルギーを司っているの」

チャリナが何物か自己紹介を終えたところで、空に異変が起きる。オーロラが一層濃くなったのだ。チャリナによると、次のメフィストの戯れは地下深くに隠れており、マグマのエントロピーを吸収しているという。あかりたちは地下にもぐり、マグマの中で戦う。あかりは戦闘ロボットさながらの強大な力にとまどいつつ、初勝利を納める。第二話の終わり、あかりはチャリナに、どうして自分がゆ

り魔法少女に選ばれたのか尋ねる。何度見ても、このシーンは笑ってしまふ。

「ねえ、チャリナ。あたしって、どうしてゆり魔法少女にピッタリなの？ 教えてくれる？」

「そんなの決まってるじゃないか！ それは君が……」
「うん！ うん！」

あかりの目が星のように輝いた。何か良いことを期待する目だ。こんな状況なら誰でもこうなるだろう。ところが、チャリナの答えはとんでもないものだった。

「あかりは思い込みが激しくて、意地っ張りで、どんくさくて、超人的に存在感がない空気だからだよ」

「ガガガガン！！！！」

「だから、ゆり魔法少女にピッタリなんだ」

「ひ……ひどい……」

「だってそうだろ？ ただの人間として過ごしたって、目立つ場面なんて一度もなかったんだよ、キミは。ゆり魔法少女になって大正解さ。あれ、なにを泣いてるんだい？ ちょっと褒めすぎたかなあ」
「ほ……ほめてないよあ……」

気がつけば、生放送の時間を大幅に過ぎていた。慌てて動画を変更する。場面は、ほとんど終わり際だった。画面にはのどかとチャリナの二人が写っている。

「のどか、ちよっと」

「なあに、レオ？」

「キミのことだから心配ないと思うけど、今のうちに話させてもらうよ。キミ地球に長くいてはいけないんだ」
「え？」

画面に沈黙が流れた。レオセーナは何を言っているのだろう。のどかは飲み込めないながらも、なにか大事なことを話していることは分かっている様子だ。

「生まれたときから、なんとなく分かっていたらどう？ 自分が人

間じゃないんだってことを」

「う……！」

「のどか、キミはこの銀河で二百万年前に栄えていた惑星で、死産した女の子なんだよ。ボクらレオセーナは、キミの魔法少年としての資質を見込んで、死産直後のキミを引き取らせてもらった。いずれ現れる、次に人間が生まれる惑星、地球の危機を払うためにね。キミは地球における唯一の、純粋なゆり魔法少女……言うなれば、人工生命体なんだよ」

「そんな……」

「キミのシヨックは察するに余る。ただ、いつまでも気づかずにいられることじゃない。やがてキミは完全体に成長し、ボクと一緒に地上から去る日が来る」

「ち、地上から去る……？」

「のどかは震えていた。返答を聞くのが恐ろしい様子だ。しかし間を置かず、レオセーナは口を開いた。

「邪神の魔の手を払える力を備えるのは、地球のゆり魔法少女たちだけだ。でも今のあかりにはそれだけの力がない。ボクらは彼女を成長させた後、次の戦いに備えて眠りにつく。のどか、キミのその目的を果たすために、蘇った命なんだよ」

「……………」

「のどか面持は沈痛だった。

「ねえ、レオ……あたし……わかるんだ、なんとなく。……眠りにつくって、死ぬことなんでしょ？」

「そうだよ」

「ねえ、あたしって、何のために生まれてきたのかなあ。生まれてすぐ死んで、ゆり魔法少女になって、それでまた死ぬために、生まれてきたのかなあ……」

「元気をだして、のどか。女の子はみんな、魔法少女なんだよ。生まれたときからすでに、ね。だから、覚悟を決めるんだ。戦い抜くしかないんだ、って」

「うん……………」

のどかはうつむいたままだった。月は煌々と照り、青白く光る雲海はどこまでもつづいていく。流れてきた入道雲がのどかたちを包み、視界は数メートル先も見えなくなった。おぼろげな月だけが、かすかに周囲を照らしている。そのまま時が流れた後、チャリナが言った。

「一緒に頑張ろう、のどか。戦い抜いたとき、君は変わる」

「……………うん！」

のどかの顔に明るさが戻った。

そこで第三回は終わった。チャリナとは気が利くキャラクターだ。キユウベエもこうやって、励ましてもらいたいものだ。場違いに明るいエンディングの後、次回予告が入る。次でいよいよ最終回だ。ナレーションはあかりだ。こんなことを言っている

「あたしね、ホントはただ目立ちたくって、メフィストの戯れと戦ってたの。だから、やめろっていう、みんなの気持ちもわかる。でも、ここで逃げたら、みんな壊されちゃう！あたしは、この街を、お父さんを、お母さんを、友だちを、みんなを、壊させない！ほかの誰が止めたって、あたしは戦う！」

一枚絵とともに『最終回 この奇跡、大好き！』と表示され、動画は終了した。主人公の激変ぶりに、コメントの賛否両論がかまびすしいが、何となく勇気をもたらった気がした。

ママは浴室へ行く。壁ガラスの小部屋にある浴槽から、ゆらゆらと湯気がのぼる。保温機能をセットしておいたから、もう温まっていた。

「準備よし、ね」

ママは浴室にあるカゴへ、服をほつり込んでいく。セーター、ブラウス、スカート、パンツ……………ブラジャーを外すとき、胸が揺れた。「あら、育ったかしら？」

胸を揉むと、昨日より膨らんでいる気がした。ピンク色の乳首をコリコリする。鏡を見る。中学生にはありえないほどのセクシーな

胸だ。この胸はマミにとって、母の遺産だった。見ていると、位牌の隣の家族写真、その中にいる女性の、自分は娘なんだと、感じる事ができた。壁に架けたアカすりを取り、ボディシャンプーをつける。体を念入りに洗う。続いて髪を洗う。要らない毛を処理する。浴槽に入る。窓越しに見える彼方、ビルとビルがなす地平線に、かすかな夕日が見える。

「きれいなね」

夜のとばりが見滝原市を覆う。太陽が沈む瞬間、広がる黒い影は、まるで魔獣のあくどい意思そのもののように思えた。魔法少女として、やつらと戦っている。魔獣の目的はいまだにわからない。宇宙の歪みを修復するためだと、キュウベエは言う。歪みが何故生じたかは、キュウベエにもわからないそうだ。

「もうすぐわかる」

マミは感じていた。暁美ほむらが仲間になつてから、運命の歯車が動き出したことを。彼女の戦闘力は尋常ではない。まるで、遠い昔から戦い続けてきたかのようだ。その瞳の奥には、この世界そのものを覆す秘密が潜んでいると、マミの経験が告げていた。それはなにか？

「……クス、こんなこと、考えてたつてしょうがないか」

いまはじっくり休もう。明日も激しい戦いが待っている。

(後書き)

マミさんの日常が描きたくなり、いろいろ描きこんだらこうなりました(汗)。

劇場版がたのしみですね。

マミさんだって、アニメくらい見るはずですw

本編中のアニメは問わずもがなゆるゆるりが原作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1668ba/>

マミさんのある夜のこと

2012年1月4日06時45分発行